松 江 市 史 講 座
平成 25 年 9 月 21 日

“プレ出雲国”成立の背景
― 古墳時代中・後期の松江 ―

松 尾 充 晶

（1）“プレ出雲国”から出雲国へ

□“プレ出雲国”とは … 令制国としての出雲国（7 世紀後半～8 世紀初頭に整えられた地域区分）の前身となる地域結合体を指す

□プレ出雲国～出雲国の領域はどのように定まったか

・国郡里制（大宝律令、大宝元(701)年）
　↑・国境画定事業（『日本書紀』天武 12(683)～14 年）
　　↑・立評（『常陸国風土記』孝徳朝 大化 5(649)年頃）
　　※評（こおり）＝大宝令以後の郡
　　… 国造の支配領域をもとに再編（分割、統合）して設定される

□出雲国造の支配領域「国」とは

・『日本書紀』斉明天皇 5(659)年　是歳条　…杵築大社の造営記事か

「出雲国造名を闕せり。に命せて、神の宮を修厳はしむ。狐、於友郡の役丁の（略）」

・斉明朝の於友評は 8 世紀以降の意宇郡より広く、大国造の領域をあてて立てられた。
　杵築大社、熊野大社の双方を包括する。（平石充氏）
　　⇒神郡（評）は当初大オウ評、のちに分割されて熊野大社のある意宇郡となるが、当初（7 世紀中頃）は杵築大社のある出雲郡に相当する領域も含まれていた（＝出雲国造の支配領域とみる）。

□出雲国造（出雲臣＝東部出雲に基盤をもつ出雲でもっとも有力な豪族）の進展過程

・装飾付大刀配与のありかた…7 世紀初頭には定型的な大刀（双龍環頭大刀）の東西差が解消し、斐伊川（上中）流域に分布拡大→最高首長氏族である出雲臣が介在する秩序に組み込まれている
　＝“プレ出雲国”の完成
　⇔・6 世紀中頃～末までは、出雲の東西それぞれに、拮抗する大首長が存在
　　・王権中枢との交渉先、ルートの差異が大刀系統の差異に反映
　　・王権中枢にある大伴造氏族の浮沈が、地域の首長権構造に反映する
　　用明天皇 2(587)年、物部本宗家の滅亡…西部首長の従属につながっていく

（2）祭祀儀礼と首長権

□出雲の特異性

・記紀神話、説話に投影される出雲像
・国造（神賀詞奏上儀礼）、杵築大社、神社（官社）…神祇面での特異性は明確
　→確実な史料上は 8 世紀以降に確認できる
　⇔7 世紀以前の実相を反映（継承）しているはずだが、考古資料とのギャップが問題
・出雲国風土記に記載される神社はどういう原理で選択されているか？
　・祭祀対象すべてが神社になるわけでない（意宇杜、楯縫郡神名樋山の石神など）
　・地域（共同体）の神がすべて神社に祀られるわけでない（飯石郡波多郷の波多都美命、同来嶋郷の伎自麻都美命など）
　・記載神社の数は、郡別に大きな多寡がある（前述の国造領域“プレ出雲国”に集中）
　　⇒風土記社の認定にあたっては、祭祀を介した首長間関係が反映される（人間集団と対応して自生的に発生するのではない）
　　＝神祇面にあらわれる出雲の特異性は、国造出雲臣に連なる首長間関係に起因する

□古墳、前方後円墳と首長の祭祀

・首長権の動態は古墳（墳墓：墳丘、外装施設、埋葬施設、副葬品等）から論じられてきた
・地域における首長の役割
　①灌漑水田システム（農耕水利に伴う利害）の調整
　②地域間ネットワーク（人、もの、情報：首長間交通）の維持
　③共同体を維持するイデオロギー（祭祀）の管理
・前方後円墳祭祀…前方後円墳は古墳時代の政治秩序を表現、正当化する最大の装置。その築造～埋葬に関わる祭祀が、首長と共同体を維持するために必要な仕組みと理解される（広瀬和雄氏「亡き首長がカミとなり共同体を守護する」）
・「前方後円墳祭祀」の画一性を重視する言説が主流
　⇔列島内おしなべて、前方後円墳祭祀の比重が一定だと言えるのか？

□出雲における首長の祭祀

・6 世紀後葉～7 世紀初頭、首長が執りもつ祭祀が認められる
　（前田遺跡、キコロジ遺跡、古志本郷遺跡、青木遺跡など）
・一般に「水辺の祭祀」と総称される祭祀行為の内容は様々だが、出雲での上記遺跡は立地（川・交通路との位置関係）、祭具構成（実用の鉄刀を使用）にみる共通性が高い
　＝ 首長間の祭祀に関する観念共有がある
・前田遺跡（松江市八雲町東岩坂）意宇川支流の東岩坂川河道岸に石敷きを施した祭祀跡。多量の木製品、土器を河道に投棄する。玉類や桃核等の奉斎品のほか、琴、頭椎大刀など高階層者（首長）が執行したことを示す。→整備された祭祀空間の規模、祭具の階層、立地からみて、出雲東部の大首長による祀り（出雲国造の奉斎神：後の熊野大社に関わるものか？）
・キコロジ遺跡（松江市朝酌町）朝酌渡（枕北道）に接する谷奥湧水地、大刀等
・古志本郷遺跡（出雲市古志町）神戸川支流の流路べりに土器、鉄刀 2 振を置く
　…主要交通路（山陰道）の渡河地点、7 世紀末(?)には同所に神門郡の郡家が設置される
・青木遺跡（出雲市東林木町）斐伊川に面する低地に土器、鉄刀 1 振を置く
　…水陸交通路の結節地点、8 世紀前葉には同所に神社が建設される

⇒国造出雲臣と地域の首長層間では、整えられた祭祀体系が共有されていた

□古墳時代中期の首長権構造

・宍道湖、中海沿岸の小地域　大型方墳→前方後方墳（渡辺貞幸氏「中小首長の連合同盟関係」）
・玉作遺跡の拡散、滑石製玉類の生産と消費…上記の「同盟」の領域と同一
・石田遺跡（松江市浜佐田町）佐太水海に面した谷奥湧水地、琴、扉板など、5 世紀後葉～末
　→6 世紀後葉の首長祭祀と構造が類似。突出して古い（雄略朝期）。

（3）まとめ

■出雲国の前身となる“プレ出雲国”とは出雲国造の支配領域であり、7 世紀初頭に完成した。
■6 世紀中頃～末の王権中枢での変動が、その統合の背景となった。
■6 世紀末～7 世紀初頭、出雲国造に統属される首長間では祭祀体系の共有が整えられた。
■こうした首長層による祭祀管理の原型は 5 世紀後葉～6 世紀前葉の現松江市域に認められる。